

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號四第卷一十五第

月十年五十和昭

論叢

廣民族主義について……………文學博士 高田保馬

法幣の「法定相場」「市場相場」及「商業相場」……………十龜盛次

時論

金の將來……………經濟學博士 飯島幡司

研究

保險に於ける個人……………經濟學士 佐波宣平

國際カルテル序説……………經濟學士 田均

國際貿易の概念……………經濟學士 松井清

說苑

ハンス・フン「二十世紀の歴史的自覺」……………經濟學士 出口勇藏

「ライアー」社會集團に關するマイヤーの見解……………經濟學士 大橋隆憲

附錄

彙報

外國雜誌論題

國際貿易の概念

——貿易理論に於ける國家概念の批判——

松 井 清

一 古典派理論及びその亞流の批判

國際貿易は、異つた國家の間に行はれる商品交換である。國際貿易は、一國家の内部に於て行はれる商品交換——國內商業とは異つた法則によつて支配される。全然異つた法則ではないにしても、幾分モディファイされた法則によつて支配される。何故かと云ふに、そこには國家が介在するのである。國家を捨象することによつて構成された國內商業理論が、國家を導入することによつて、それだけのモディフィケーションをうけるわけである。従つて國際貿易の概念を明らかならしむることは、同時に國家の概念を明らかならしむることであると云はなければならぬ。これまで國際貿易論なる特殊の部門に於て、先づ國家の概念が考究されて來たのは、かゝる理由によるのであらう。

ひとびとが『貿易理論に於ける國家概念』と呼び慣はして來たかゝる國家は、勿論歴史的に與へられた現實の國家からかけ離れたものであつてはならない。貿易理論の前提として入り込む限りに於て、成程それは一つの抽象であり、型である。けれどもその抽象はあくまで現實にまで具體化さるべき抽象であり、云はば現實的な型で

なければならぬ。リカードが、勞働及び資本の自由に移動し得る地域を國內とし、勞資の自由に移動し得ない地域を外國と規定するとき、彼はかゝる規定を十九世紀に於ける英國の現實から抽象したのである。そしてこの規定は當時の英國にとつては、一應論理的に誤りでなかつたのみでなく、實踐的には合目的であつたのである。誤謬はかゝる規定が、觀念化し、固定化したことより初まる。既にミルに至ると、現實的な國家と理論上に於ける國家の概念との間に分裂が生じ、理論上の國家は近接地を意味し、外國は遠隔地を意味してゐる。²⁾ 國際貿易は政治的國家に關係なしに遠隔地間の取引なのである。ケアンズが廣く無競争集團間の取引と規定するのも、³⁾ それが現實の國家から遠ざかつてゐる點に於てはミルと同一であると云ふことが出來よう。このような概念の固定化は、古典派貿易理論の亞流である主觀派の貿易理論(ひとびとはの學派を古典派に對立せしめて近代貿易理論と呼んでゐる)に於て一つの方法論的基礎づけを與へられた。ハーバラーはさう云つた方法論に立脚して次のように述べてゐる。『吾々は、古典派によつて想定された諸前提が今日もなほ存在するかどうか、あるひは特定の時代に存在して居たかどうかと云ふ經驗的問題と、この様な諸前提の下に打ち樹てられた一般の命題が正しいかどうかと云ふ理論的問題とを區別しなければならぬ。』⁴⁾ 彼によると、政治上の國家は國民經濟の本質的な特質、即ち何らの價值判斷なしに客觀的に確定される固有の性質によつて與へられるものではなくして、超科學的な價值設定によつて與へられてゐるのである。表面的には國民經濟の統一の客觀的な基礎をなしてゐると思はれる様な種々の共同性、即ち資本共同體、支拂共同體、本位共同體は國內と外國との政治的な區別の原因と云ふよりもむしろ結果である。オーリンが *interregional trade* と云ふとき、⁵⁾ かゝる概念もまた、政治的國家から自らを峻別してゐ

1) D. Ricardo: Principles of political economy and taxation (ed. by Conner), p. 114.

2) J. S. Mill: Principles of political economy (ed. by Ashley) p. 575.

3) E. Cairnes: Some leading principles of political economy, 1874, p. 302.

4) G. Haberler: Der internationale Handel, 1933, S. 3.

る點に於て、ハーバラー的の見解と同一の基礎の上に立つ。

概念のこのような固定化、經濟上の國家と政治上の國家とのこのような分裂の根據を尋ねるならば、それは獨占資本主義時代に入つて生じた國際間の資本移動、國內に於ける勞資移動の若干の不自由である。ミルが既に國際間に於ける資本移動の存在を指摘し、ケアンズは國內に於ける勞働の非移動性の事實を明らかにし、かくて古典派の概念が現實的な問題として、その妥當性を失つてゐることは、最早周知のこととして認められてゐるのである。古典派を育んだ近代國民國家は依然として存在するにも拘らず、古典派的な國家の概念は既にその妥當性を失つてゐる。この事實はわれわれに何を教へるのであらうか。古典派の方法の誤謬であつたことをである。

古典派はその國家概念を十九世紀に於ける英國の現實から抽象した限りに於て正しかつたのであるが、その方法に於て誤りを犯してゐた。言葉を換へて云ふならば、彼等は近代國民國家の經濟的基礎を本質的な點に於て把えずして、表面的な姿に於て把へたのである。なるほど勞資の移動自由なる事實は、近代國家を經濟的に特徴づける重要なモメントである。そしてその事實の變化が近代國家の姿を或る程度まで變化することは認められねばならないであらう。けれども近代國民國家の經濟的基礎は、單にその事實のみに依存するのではない。そしてその基礎が失はれない限りに於て近代國民國家の存在は依存として合理的に説明されるのである。

二 生産條件による概念の規定

歴史の各段階に於て人間は特定の生産力を持ち、かゝる生産力に應じて特定の經濟構造を結ぶ。いま生産力を

技術的に條件づけるものを技術的生産條件と呼び、これを社會的に條件づけるものを社會的生産條件と呼ぼう。技術とは人間が自然に對して働きかける媒介をなすものであり、従つて技術的條件を問題にする場合には、當然に自然的條件——民族の生理的特質、土地、氣温等、總じて風土と稱せられるもの——も考慮のうちにとり入れられなければならぬ。社會的生産條件とは、例へば古代に於けるローマの奴隸と奴隸所有者、封建時代に於けるロシアの農奴と領主、近代に於けるイギリスの勞働者と資本家と云ふような社會的關係が生産力に對して與へる諸制約である。原始的な物々交換を除いて考へるならば、生産の技術的條件と社會的條件とは決して切り離して考へることを許さない。技術的條件はそれ自身としては無意味なのであり社會的條件と結びつくことによつて始めて意味を持つ。社會的條件もまた自らのうちに技術的條件を含むことによつて、始めて具體的な生産條件として現はれるのである。かくの如く特殊に條件づけられた生産諸力は、例へば特殊の古代的經濟構造、封建的經濟構造、近代的經濟構造と云ふ様に、特殊の經濟構造を持つわけであるが、然らばかゝる特殊の經濟構造と、政治的・法律的・國家的構造とは如何なる關係に立つであらうか。こゝではその何れが決定的な力を持つかと云ふカズイステイクには立入らないこととして、唯兩者が切り離し難い關係にあること、兩者の相互關係に於ける具體的あり方が問題であることを強調しておこう。政治と經濟とを形式的に分離する純粹經濟學的偏向から如何にしてまぬがれるかが主要な問題である今日、われわれにとつてはこのことのみが必要なのである。

さてわれわれが此處で取扱はうとする國際貿易は近代國家間の貿易であり、國家は資本主義的生産方法に立脚する近代國民國家である。尤も貿易の歴史は極めて舊い。舊生産方法に立脚しそれ自身の内部に於ては自給的な

生産を行ふ古代國家に關しても、國際間では生産物は或る程度まで商品として存在し、商業的取引の對象となつて居た。そして商品となつた限りに於て、生産物は一定の價值を持ち、生産條件は價值のうち何らかの表現を見出すに至つた。かゝる商品流通が次第に成長するにつれて、舊い經濟構造に解體的な影響を及ぼし、やがて經濟構造そのものの變革が近代資本主義を生むに立つたことは、商業史に關する書物の教へる通りである。一度び資本主義的生産方法が支配的となれば、生産物は最初より商品として生産せられ、生産條件は商品價值のうち集中的な表現を見出す。對象を歴史上に求めるときには、十八世紀の末葉に始まつた英國の産業革命を先頭として各國に繼起した産業資本主義の確立を中心とした段階が問題となる。産業革命を中心とした技術上の發明は、自然的條件を漸次克服しつゝあるかにも見えるけれども、而もなほ完全にこれを克服してはゐない。且つ注意すべきことは、一見國際的に見える技術の採用それ自身も、社會的條件によつて制約されることである、特定の社會的要因が資本の蓄積を妨げてゐるような場合高度な技術の採用は不可能となるのである。このことは舊社會の殘滓が強く存在するところでは特に著しく、その意味に於て、今日においてもなをわれわれは技術的な條件の均等と不均等とを以て國內と外國とを區別することが出来るのである。次に勞働者と資本家の關係によつて條件づけられるところの社會的生産條件である。古典學派は勞資の自由に移動しうる地域を國內とし、その自由に移動し得ない地域を外國とした。そして古典派のこの見解は或る程度まで眞實であつた。蓋し近代資本主義生産は一國民を主體として發生し、勞資の移動自由の範圍は國境と一致したからである。しかし乍らこの事實は、それが一國の生産條件を均等化せしめ、國際間の生産條件を不均等におく限りに於て問題なのである。獨占資本主義時代

に入つて生じた大量の國際資本移動は、或る程度まで生産條件の國際的均等を招來したのであり、かゝる事實は無視することを許さないけれども、而もなほそれは生産條件の差等を解消し盡したと云ふことは出来ない。その意味に於て、今日最早古典派の概念は妥當しないに拘らず、國民經濟の經濟的基礎は依然として存在するのである。例へば英國の資本が支那に輸出される場合、このことは支那に残存する舊生産方法に解體的な作用を及ぼし支那の資本主義化を促進する。それは一種の生産條件均等化の傾向であると云へよう。がこの場合でも生産過程に於ける英國の資本對勞働の關係と、支那の資本對勞働の關係は著しく異つたものである、依然として生産條件の均等と不均等を以て國內と外國とを區別しうる所以である。生産條件の國內的均等は、資本金利潤(利子)の國內的均等、勞働賃銀の國內的均等となつて現はれ、生産條件の國際的不均等は、資本金利潤(利子)の國際的不均等、勞働賃銀の國際的不均等となつて現はれる。そしてその結果は生産された商品價值(價格)に集中的に表現されるわけである。従つてそれは表面上の姿に於ては價格形成に於ける需要と供給によつて決定される如く見えよう。現に近代貿易理論が生産條件を取扱ふときには、常に商品價格決定に參與する需要條件と供給條件のみが問題となるのである。資本主義が存在し流通經濟が維持される限り、かゝる立場の意義も認められてよいであらう。特に價格經濟を維持しつゝ、それを無視したような政策に對してはかゝる立場もまた充分の批判的意義を持ちうるのである。しかし乍らそれと同時に、公定價格の如きが現實の問題となつてゐる段階に於ては、單に需給の關係のみを以てしては價格現象それ自身をすら解き得ないことを強調しておきたい。われわれが生産條件の分析から出發してその現象形態である商品價格にまで到達すると云ふ方法をとるのは、かゝる理由によるのである。

生産條件が商品價格に集中的に表現されるに至るとき、そこに當然問題になつて来るのは流通上の諸費用である。流通上の諸費用もまた商品價格の上に何らかの作用を與へる限りに於て無視することを許さない。運送・倉庫業に要する費用、商業・金融上に要する費用等である。これらは生産物の素材的性質に何らの變化を加へるものでなく、従つて固有の生産とは區別されるが、生産物の價値は消費に入つて始めて實現され、その實現にとつてかゝる費用が不可避的なものであると考へれば、廣義の生産のうちに加へられる。そしてその限りに於て流通上に作用する諸條件は國際貿易の概念を規定するに際して意味を持つのである。かく考へるならば運送費の大小を以て國內と外國とを區別しようとしたシデウィツク¹⁾の見解の妥當範圍も自ら明らかになるであらう。運送費の大小のみを以て國の内外を區別しようとする見解は明らかに誤りである。何故ならば、同じ一國の内部に於てもアメリカの西部と東部との距離は、アメリカの東部と英國との距離よりも大であるし、また假令一國內の距離が外國との距離よりも小であるとしても、前者が陸運であり後者が海運である場合、運賃からすれば國內運賃の方が國際運賃よりも大でありうるからである。運賃が國內と外國とを區別する何らかの役割を果しうるのは、運輸業に特殊な技術的社會的條件が、商品價格に何らかの特殊な表現を見出す場合である。

われわれは右に於て狹義の生産條件から出發し、更らに流通條件ともこれに含ましむることによつて、廣義の生産條件による規定を行つたわけであるが、次に流通に作用する貨幣的諸條件をとりあげよう。蓋し生産力を條件づける諸契機が結局商品價格に集中的に表現されるとすれば、貨幣的諸條件もまた無視することを得ないからである。表面的にも金が價値の一般的尺度として現はれ、金鑄貨そのものが流通するか、或ひは金鑄貨に常に兌

1) H. Sidgwick: The principles of political economy, 1901.

換されうる紙幣が流通する、典型的な金本位制を假定する場合にはさしたる問題が生じない。この場合貨幣は各國の異なつた制服を着せられ、異つた本位貨として現はれるにしても、金重量に於ける比率(平價)を通じて各國の商品価格は共通の基礎の上に立つてゐるからである。若干の問題が生じ、そして名目學者を感はすかに思はれるのは、金兌換が停止せられ、従つて特殊の貨幣政策・信用政策が流通に積極的な作用を及ぼしうる可能性の與へられた謂はゆる紙幣本位制の場合である。この場合相當廣い範圍内に於て各國の物價は獨立した運動を行ひ、その限りに於て商品價格に於ける貨幣的條件の作用も考慮される必要があらう、けれどもその場合に於ても爲替その他の信用機構を通じて各國の價格を共通の基礎の上に立たせようとする作用の働くことは、如何なる強力なる政策の下に於ても、之を無視することを許さない。そしてかゝる爲替その他の信用機構の作用を基本的に保證してゐるものが、世界貨幣である金の國際移動なのである。これは何らかの形に於て商品生産の維持される限り、好むと好まざるとに拘らず認めねばならない事實である、われわれは商品生産の無計畫性を排除し、金から解放されようとする希望と現實解釋とが別の問題であることを、此處で特に強調しておきたい。かく考へるならば本位貨の差異を以て國際貿易の概念規定をなさんとするレプケ²⁾、オイレンブルグ³⁾、カツセル等の見解に對する評價も自ら定まるであらう。本位貨の差異を以て國際貿易の本質的特徴とする見解は、如何なる意味に於ても誤謬である。何故ならば紙幣本位の場合に於てすら、名目學者の目には映じないにしても、金が各國の貨幣を共通の基礎の上に立たしてゐるからである。だがそれと同時に紙幣本位制の下に於ては、各國の價格が相當廣範圍に亘つて獨立の運動を行ふ可能性の存することは、これを認めなければならぬ。そしてこの場合本位貨の差異は商品

2) W. Röpke: Geld und Aussenhandel, 1925.

3) F. Eulenburg: Aussenhandel und Aussenhandelspolitik, 1929.

4) G. Cassel: Theoretische Sozialökonomie, 1929.

價格を通じて國際貿易にそれ自身としての作用を及ぼしうるのである。

(註) 以上の見解は筆者のかつての小著『貿易理論の研究』におけるそれを若干發展せしめたものである。右の小著に對しては松井榮一¹⁾氏、岩田俊氏²⁾及び谷口重吉氏³⁾により多少の批評が與へられた。特に谷口重吉氏の自己の見解を展開しながらなされた批評は極めて示唆に富むものであつた。いま氏の見解との相異を明らかにすることは、問題の所在をより明確にするであらう。氏の御高教を乞ふ所以である。

氏は『総合的な見地』より貿易現象の特質を明らかにすべきであるとき、人為的生産條件、人為的配給條件、通貨條件を等しくする地域を國內としそれを異にする地域を外國であるとされる。『人為的』とは『自然的』に對する言葉であり、人為的生産條件のうちには技術的條件と社會的條件と經濟的條件とがあげられてゐる。先づ疑問に思はれるのは生産である以上人為的でない生産があるかと云ふことである。自然的生産條件と云ふ場合ですら、人間が自然に働きかける際の自然が問題となるであつて自然そのものが問題となるのではない。従つてこの場合人為的と云ふ言葉は用ひられない方が良いのではなからうか。更らに氏は人為的生産條件のうち經濟的條件を擧げて居られるが、生産條件と經濟條件とは如何なる點で異なるのか生産條件を分析してその中から經濟條件が出て來ると云ふのは如何なる點よりしてもおかしい。通常の用語例では生産條件と經濟條件とは、同じ事柄を別の方向から云つたものにすぎない。かうして氏の見解を整理してみると結局残るものは人間が自然に對して働きかける際の條件である技術的條件と人間と人間がおりなす社會的條件とではないか。『総合的』と云ふことはそれらしいものを寄せ集めると云ふことではない。

生産條件と配給及び通貨なる流通上の條件との關係について、前者を基本的なものであるとし、後者を基本的なものを実現するものであるとされる氏の見解は、われわれと全く同じである。しかし不思議に思はれるのは、かゝる見解——それはあくまで生産の側を重視する立場である——をとりながら、氏が貨幣側にもまた何らか基本的なものを認めようとしてある點である。その意味で生産の側を重視する立場から當然結果する筆者の貨幣觀に對して與へられる氏の批評は、先づ氏自身がノミナリストとしての立場を決定してからなさるべきであらう。生産と流通の關係に關して生産を基本的なものとしながら、貨幣觀に於てのみノミナリストイックであるのは、方法的な混亂であると考へるのであるが、それはそれとして氏のこの點に關する見解にも少し觸れておこう。そもそも問題は金本位の場合はどう、紙幣本位の場合はどうと云ふのではない。兩本位制の差異は、既に本文で觸れたように極めて重要なものではあるが、苟しくも貨幣の本質を問題とする限り、そこに共通的なものを

1) 松井榮一氏：「松井清：貿易理論の研究、新刊批評」(國民經濟雜誌)。
2) 岩田俊氏：「松井清：貿易理論の研究、新刊批評」(三山學會雜誌 33卷上)。
3) 谷口重吉氏：國際貿易の概念、研究と資料 9號。

認めねばならないことは、こゝにことはるまでもない。谷口氏は筆者が世界貨幣としての金をとり上げるのに對して、金それは本位制ではともかく、紙幣本位の今日では適當でないとされる。氏は今日金を貨幣と認めず、純然たる商品とされるのである。氏は今日に於ける政府の金買上政策を如何に見られるであらうか。政府は奢侈品禁制のこの時代に『黄金の便所』を建てようとしてゐるのであるとでもされるのであらうか。世界貨幣としての金を役割を認めずして、今日の金買上政策は解らない。この際に於ても金から解放されようとする希望と現貨解釋とを嚴に區別する必要があるであらう。その希望が強ければ強ほど現貨の金の役割は正確に把握せねばならぬのである。フランク經濟相ですら世界貨幣としての金の役割を認めてゐるのであるが氏はそれをどう見られるであらうか。

次にオイレンブルグの説につき筆者が『恐らくオイレンブルグの如き見解は、各國の金輸出が停止され、偽替相場が平價から背離せる最近の事實に着目して生れたのであらう』と書いたのに關し、併し『オイレンブルグが本位制の差異を以て、國際貿易を特色づける標準となすのは、單に金本位を離脱せる最近の場合にのみ妥當するのではなく、金本位の場合にも、その他の場合にも等しく適用されるものなることを明言してゐる』と云ふ批判をなされる。この點筆者の言葉が簡單であるため氏の誤解を招いたものと考へられるが、筆者はオイレンブルグが自らの見解を、紙幣本位の場合にのみ適用してゐることを何ら主張するものではない。むしろそれを金本位制の場合にも適用せんとするところに、オイレンブルグをも含めて、一般的ナノミナリズムの意義が存するのである。オイレンブルグの見解を紙幣本位と結びつけたのは、彼の見解の經濟的背景を明らかにすると云ふ意味でさうしたにすぎない。この點に關する氏の批判は從つて問題とならない。

三 國際貿易の概念

生産諸力の發展に伴ふ生産條件の變化は、國際貿易の概念を變化せしめる。生産條件による規定は、國際貿易の概念の變化に觸れることによつてより具體的なものとなるであらう。この問題は『國際貿易政策思想史』の内容を形成するもので、一應別の課題を提供するが、こゝでは生産條件による國際貿易概念の規定の意義を明らかにすると云ふ意味で、鳥瞰圖的に極めて簡単に觸れておくことにしよう。

最初に産業革命を経験し、技術的・社會的諸條件により生産力の優位を有する國として、先進國として現はれた英國に於ては、國際的と云ふことは同時に世界的と云ふことであつた。國家とか國民とかは自覺されないことはなかつたのであるが、むしろ意識的に個人を主張することが却て國家的であり國民的であつたのである。この一見、パラドキシカルに感ぜられる言廻しは、古典派を單純なる個人主義・自由主義として片著けるような傾向に對して特に強調される必要があらう。今日の墮落した個人主義に對し、發生期のそれらは同時に全體的な意識にまで高められてゐたのである。『諸國民の富』と云ふスミスの著書の題名に深く思ひを至すとき、このことはよく理解されよう。スミスの取扱ふ人間は、彼の支配し得る資本のために最も利益ある用途を見出さんとして絶えず努力しつゝある利己的な人間である。彼の目標とするところは自己の利益であつて決して社會の利益ではない。けれどもスミスはそれらの利己的な人間の活動が自然的に必然的に、社會全般の福祉に導くものであると云ふことを附け加へるのを忘れなかつた。¹⁾ 古典派に於てスミスよりも更らに市民的な偏向を云々されてゐるリカードに於ても同様のことが云へるのである。リカードに於ける人間も又極端な利己心によつて活動する個人であり、彼の常に求めるところは自己の資本を如何にして有利に投下しうるかと云ふことであつた。しかし此の個人的利益の追求が、よく全體の全般的福祉と結びつけられてゐることは、實に驚くべきことであると云ふことをリカードもまた強調してゐるのである。²⁾ 尤もかゝることが一つの觀念となつて終ふとき、それはドイツのマンチェスター學派や大戰後に出沒するリベラリズムのように、それこそ單なる個人主義に墮落するのである。然るに古典派に於けるかゝる思想は、英國の經濟機軸に根をおくものであり、云はば生活そのものから湧き出たものであつた。

1) A. Smith: *Wealth of Nations* (Cannan's ed.) Vol. I, 419.

2) D. Ricardo: *ibid.* p. 114.

リカードが自由主義を論ずる同じ章の中で國家の經濟的規定を行つてゐることを併せ考へるならば、リカードに於てさへ國家が意識に上されてゐたことを理解しうるのである。古典派に於ける國際貿易即世界貿易と云ふ概念はこのように解せらるべきであらう。個人と世界との間には體系性を有する従つて主體性を有する國家が存在するのであり、世界經濟は之に對し單なる市場として存在するにすぎない。

技術的社會的諸條件により生産力の劣位を有し、後進國であるドイツに於ては、國際貿易と云ふことは世界貿易と云ふことではなかつた。國際貿易を論ずる際にはむしろ媒介する國家の、國民經濟の意義を強調するところにドイツ經濟學の任務が存したのである。周知のようにリストは、古典派を『萬民經濟學』であると規定し、自らを之に對立せしめて『國民經濟學體系』³⁾となしたのである。彼の說に従へば今日實現されてゐる諸個人の統一のうち最高のものは、國家および國民の統一である。考へ得られる最高の結合として世界的規模に於ける個人の統一が存するが、それは單に考へ得らるる一つの理念にすぎない。リストの見た現實においては、國際貿易によつて成立しつゝある諸國民の統一は、尙ほ極めて不完全なものである。何となれば、それは戦争によつて、また個々の國民の利己的な政策によつて、中斷されるかまたは弱められるからである。當時のドイツが英國に較べて遙かに劣つた生産力を所有し、従つて英國の競争から自らを防禦する必要にせまられてゐたことを知るならば、リストの思想に於て國家の積極的意義が強調せられたことは容易に理解せられよう。リストに於ては個人と人類との間に國民が介在し、その『國民體』の特質の究明することに全努力が傾倒されてゐる。『特殊の言語と文學』と云ひ『固有の血統と歴史』と云ひ『特殊の風俗と習慣・法律』と云ひ『存在・獨立・完成および永續に對する要

3) F. List: Das Nationale System der politischen Oekonomie.

求」と云ひ、更らに「區劃された領土」と云はれるところのもの、更らにまた「精神と利益との無數の紐帶を通じて獨立に存在せる一つの全體」と規定されるところのものは、すべてリスト的に規定された「國民體」の概念に外ならないのである。生産力の優越を有し、國家の干渉なしに交易することに最も利益を有した英國に於いて國家は謂はゆる『夜警國家』として現はれ、國際貿易は即ち世界貿易であつたのに對し、生産力の劣位にあり國家の保護を必要とした獨乙に於ては、國家は云はば『官僚國家』として現はれ、國際貿易はそのまゝ世界貿易ではありえなかつた。國際貿易の問題とされる場合は、それに干渉を加ふべき國家の意義のみが強調され、世界貿易と云ふ状態は實現さるべき理念として存在したにすぎない。

生産諸力の發展が主として國民國家を地盤として行はれてゐる間に於ては、生産條件の均等する地域と國境とは一致し、特殊の生産條件に應じて國家が『夜警國家』として概念されるとまた『官僚國家』として概念されるにかゝはりなく、國際貿易は國家間の貿易であり、そこには何らの矛盾も存在しなかつた。古典派が國際貿易即ち世界貿易とする場合もあくまで國民經濟の立場に立つて考へられてゐるのであつて、世界貿易とは世界市場であり、國民經濟に従屬するものである。然るに獨占資本主義の時代に入り、生産力の國境を越えての發展が行はれ、或る程度まで生産條件の國際的均等が行はれるに至ると、從來の國際貿易の概念は一つの危機に直面した。ハルムスを中心とする世界經濟學派は、かゝる地盤から生れ出たものと考へられよう。ハルムスは國民經濟と世界經濟について次のように考へる。先づ國民經濟とは、交通の自由と技術的な交通の事情によつて可能にされ、同時に統一的な法律制度によつて規制され、且つ經濟政策的法律制度によつて促進されるところの、國家的に結

合された民族の個別經濟間の關係、及びその關係の相互作用の全體であると。更らに世界經濟は、ハルムスにあれば、高度に發展した交通制度によつて可能にされ、且つ國家的國際條約によつて規制され促進されるところの地球上の個別經濟間の關係及びその關係の相互作用の全體である。『國民經濟と世界經濟』なるハルムスの著書に現はれた右のような見解は、その後幾多の人々によつて批判されたが、われわれはこのハルムスの見解を二つの特質に於て把へたい。第一はハルムスが國民經濟も世界經濟も共に單なる『個別經濟間の關係、及び關係の相互作用の全體』とみることによつて、國民經濟の本質を稀薄ならしめてゐる點である。古典派の國際貿易即世界貿易と云ふ見解は、既に言及したように、世界貿易を個人間の自由な交通としてみる點に於ては、ハルムスの見解と同一であつたけれども、その場合の個人は、國家の自由なる政策を媒介とした自由なる個人であり、そこには體系的な従つて主體的な國家が自覺されてゐたのである。これに對し、ハルムスに於ては、『世界經濟雜誌』⁴⁾上で戰はされたコチニツヒとヴェーラーの論争が明らかにした様に、國民經濟の主體的把握が後景に退いて終つてゐる。第二は『國民經濟と世界經濟』なる著書に關する限りでは、世界經濟とは單に個別經濟の相互關係がありなす世界市場であるにすぎず、世界經濟の本質もまた不明となつて終ふのである。油本教授のハルムス批判は、主としてこの點に向けられてゐるようである。尤もハルムスの見解はその後漸次訂正されて行き、國民經濟に主體的な性格を認めると同時に、世界經濟にも何らか主體的な性格を認めようとする努力がなされた。⁵⁾ 世界市場と異つた意味に於て世界經濟を問題にしようとする限り、それは當然であつて、ハルムスと時を同じくして世界經濟を論じたワルタースハウゼン、ゴツトル、シュパン、ウイーゼ等に於ても世界經濟は何らか統一的な、

4) B. Harms: Volkswirtschaft und Weltwirtschaft, 1912.

5) Weltwirtschaftliches Archiv, 1925. 生島廣治郎: 世界經濟の基礎概念、229頁参照。

6) 油本豊吉: 貿易論上の國家概念Ⅱ(經濟學論集、6卷、9號) 11頁。

7) B. Harms: Weltwirtschaft und Weltwirtschaftsrecht (Wörterbuch des Völ-

體系的な、その意味に於て主體的な性格を認めようとする傾向が見出される。³⁾ しかしこゝでわれわれの注意すべきことは、世界經濟に於ける主體性を強調することは、それだけ國民經濟の主體性を弱めはしないかと云ふ點であり、その點に關する何らかの解決をハルムスに見出すことは出来ないのである。ハルムス一派を生んだ時代的背景から生れ出たものとして、世界的規模に於ける階級對立のみを認め、國民經濟の意義を否定せんとするところの例へば、ローザ・ルクセンブルグの様な、マルクス派に於ける一部の見解、政治的國家と經濟的國家の分裂を理論的に合理化する近代經濟理論の一派が存在するが、これらにはいま觸れないことにしよう。要するに生産力の國を越えての發展、資本勞働の國際的移動による生産條件の國際的均等化は國民經濟存立の地盤を解消し、國際貿易は、世界的規模に於ける個人の交通と云ふ、言葉のそのまゝの意味に於ける世界貿易になるか見えただのである。

然るに一九三〇年を中心とする世界恐慌の發生は、生産諸力の發展を阻止し、生産條件均等化傾向の停止は新なる國民主義の勃興を招來した。かゝる事態に遭遇して國際貿易の概念は如何なる變化を経験したであらうか。ひとたび生産諸力の世界的規模に於ける發展を経た後に於ける新なる國民主義は、舊き國民主義のような狹隘なものではあり得なかつた。新なる國民主義を、われわれは英國を中心とするブロック論、ドイツを中心とする廣域經濟論、日本を中心とする東亞協同體論等に於て見るのである。生産諸力の無制限な世界的伸張は阻止されたけれども、ブロック内に於て、廣域經濟内に於て、協同體内に於て、生産諸力の發展が行はれ、その限りに於てそれらの内部では生産條件の均等化が行はれる。ブロック、廣域經濟、協同體内部に於ける各々の國家は各自特殊の生産條件を所有し、それらの國の間に於ける取引は依然國際貿易たるの本質を残すけれども、而もなほ生産條件の均等化傾向は、それだけブロック、廣域經濟協同體内部に於ける取引に國內商業的な色彩を附與するのである。そして英國の中心とするブロック、獨乙を中心とする廣域經濟、日本を中心とする東亞協同體は、それ自

kerrechts, von K. Strupp).

B. Harms: Der Begriff der Weltwirtschaft (W. A. 23 Bd. 1926).

8) 作田莊一: 世界經濟學、(改造社、經濟學全集 60卷) 9頁參照。

9) ローザ・ルクセンブルグ: 經濟學入門。

體として特殊の生産條件を所有するに至り、それらの間に於ける取引は、また別の意味に於ける國際貿易を形成するのである。生産條件の均等化傾向における濃淡の階層は、幾重もの國際社會の層を形成しつゝあると云ふことが出来るよう。完全な體系性と主體性を有する國民經濟が集つて形成するブロック・廣域經濟・協同體は内部に於て一つの國際社會を形成するが、その國際社會はそれ自身また一つの體系性と主體性を持ち、他の國際社會に對立する。幾重もの國際社會の層が重り合つてゐるところに現在における國際貿易の問題が存すると云ふことが出来るよう。そしてそれらの問題は、特殊に條件づけられた生産諸力の運動についての確固たる認識を伴つて始めて合理的に解決されるのである。

(註) 油本教授は『經濟學論集』紙上の『貿易論上の國家概念』¹⁰⁾なる論文に於て、極めて示唆に富む見解を發表された。同じ問題を論ずるに當つて教授の説に關説することは、教授に敬意を拂ふ所以であらう。教授の説に於て目立つところは經濟上の國家と國際法上の國家の峻別である。教授は經濟上の國家を對外經濟法主體、外國貿易政策上の主體乃至は國際經濟單位と呼びこれを國際法上の主體と區別されるのである。例へばブリテイッシュ・ドミニオンは對外經濟法主體ではあるけれども國際法主體ではない。この様に經濟と政治を峻別される教授の意圖は解らないではない。ダンピングを論じようとするような場合一應政治的現象から切り離して概念を構成した方が、純粹にダンピングの意義を把握するのに便利であると教授は考へられるのである。しかしダンピングなる現象が歴史上の如何なる段階に於ても、政治から切り離されては生起しないことを考へるならば、むしろその結びつきに於て把へた方が妥當なのではないか。概念である以上一つの抽象には違ひないが、それはウニバーシヤルな理想型であるべきでなく、云はば一つの現實型であるべきだと私は思ふのである。教授が言及されてゐる様に一九三六年の濠洲の關稅引上げ問題を考慮に入れるならば、ブリテイッシュ・ドミニオンの經濟法的主體性もその國際法的な主體性との關聯に於て把へた方がより合理的な解釋が行はれるのではなからうか。この點に關する教授の教示を仰ぎうるならば幸ひである。然し乍ら教授の眞意は必ずしも經濟上の國家と、政治上或ひは法律上の國家の峻別を以て終るのではない。『國際的經濟單位』をして有機的統一體たらしめる成立的要因は一體何であるかを明かにせんと欲するならば、政治的共同體が經濟上において有する如上の意義如何を吟味するに若くはない。』として經濟上の國家と政治上の國家の結びつきにおける具體的あり方を問題とされるのである。そして教授は七つの共同體をあげて居るのであるが、それは、谷口重吉氏も指摘されてゐるやうに本質的要素も非本質的要素も混合された分析前の混沌でしかない。教授がそこから本質的要素を抽象されるとき、われわれは教授から眞の『外國貿易論上の國家概念』を教へられるであらう。

10) 油本登吉：貿易論上の國家概念、(經濟學論集、6卷 8號、9號)。